

会 議 記 録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	令和 7 年度 第 3 回近江八幡市総合教育会議		
開催日時	令和 7 年 1 0 月 2 3 日（木） 1 0 時 0 0 分～ 1 1 時 0 5 分		
開催場所	近江八幡市役所 3 階 市長応接室（近江八幡市桜宮町 2 3 6）		
出席者 ※会長等◎ 副会長等○	出席者(敬称略) 市 長 小西 理（◎） 教育長 安田 全男 教育長職務代理者 重森 恵津子 教育委員会委員 西田 佳成、大更 秀尚 欠席者 教育委員会委員 圓山 淳子 事務局 総合政策部企画課 教育委員会事務局教育総務課 出席所属 教育委員会事務局学校教育課、生涯学習課 傍聴者 なし		
次回開催予定日	令和 7 年 1 2 月下旬～令和 8 年 1 月中旬		
問い合わせ先	所属名、担当者名 総合政策部企画課 東 有希、中川 郁、野田 卓治 電話番号 0 7 4 8 - 3 6 - 5 5 2 7 メールアドレス 010202@city.omihachiman.lg.jp		
会議記録	発言記録 ・ 要約	要約 した 理由	内容を整理して、分かりやすく記録として残すため
内容	別紙のとおり		

担当課⇒総務課

事務局	1. 開 会 省 略
市長	2. 挨 拶 省 略
事務局	3. 議 題 【議題①】第3期近江八幡市教育大綱の素案について ①こども・保護者への意見聴取結果について ②第3期近江八幡市教育大綱の素案について
委員	<ul style="list-style-type: none"> ■ 配布資料1（内部資料）に基づき、こどもと保護者に行った意見聴取結果について報告を行った。 ■ 配布資料2に基づき、意見聴取結果や庁内所属への意見照会等の結果、第2回で提示した素案からの変更箇所について説明を行った。 ■ 意見聴取の結果は、生の声が出ている。保護者、こどもたち含めて、交流を望まれている傾向にある。教育大綱にも掲載されていたと思うが、交流という部分も生き抜く力につながっていくのかと感じた。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全ての中学生がこの意見ということではないと思うが、コミュニケーション能力、相手とどう関わっていくのか、という意見は中学生なりの思いが見えてきていると思った。 ■ 中学生が高校生になるステップアップしていく時に、人との関わりというのは、すごく大事な部分があると思っていた。 ■ 中学生も保護者も、市のアピールや、市の良さを出していきたいという意見を感じ取った。今後はそういう部分を中学生につけていきたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ■ 家庭教育、社会教育という大きな部分でいうと、こどもを持っている保護者の育ちも大事だが、子育てを終えた先輩方が、もっと学び続けたいという部分もあるし、敷居が低く学びを続けられる機会をつくるというのは、逆にいうと、一生懸命、今、子育てをされている方に手を差し伸べられるような子育ての先輩ができていくのではないかと思う。保護者や大人の市民が学んで、こどもや若い方に支援を与えるのは一番難しい部分だとは思いますが、大事だと思った。 ■ 難しい部分だとは思いますが、こどもの部分は、まちづくりクラブに参加する積極的な人、PTA 役員もある意味、こどものことを考えられる余裕のある、頑張っていてよくしていこうとする方の中心の声。それだけを意見だと捉えすぎるのは怖いと思った。 ■ 当事者として自分の思いを伝えることが難しいこども・家庭の意見が聞き取れない中で、一部の人たちの意見だけで納得してしまうこ

とは怖いと感じた。

- 校区を越えたクラブ・サークルや居場所づくりという意見について、今現在、本市で取り組み出した中に、校区を超えたクラブやサークルがある。まちづくりクラブやデータサイエンスクラブなど方向性は間違っていないと感じた。
- 居場所づくりについては、どういう場所かは熟考するところがある。児童クラブやビフォースクール、アフタースクールなど、政策議論の中でも要望もあるし、考え方を表明されているが、大人にとってのこどもの居場所づくりでなく、こどもが生き抜く力を育むための居場所づくりを議論し、施策に反映できる大綱にしていきたい。
- 文化祭のあり方について、以前のような文化祭をという話があった。コロナ以前は文化祭、体育祭、音楽祭があり、3つの大きな事業が秋にある。当時の文化祭は合唱コンクールではなく、学年、クラスそれぞれが寸劇や発表、展示、ポスターセッションなど、生徒が考えながら実施していた。
- 一方で、教員の働き方改革の観点からすると、2か月間にわたって、こどもが夕方遅くまで準備にかかり、教員も指導したり見守ったりする部分があり、ハードな勤務状況があったように把握している。
- コロナ禍で文化祭等ができなくなり、再開したときに今の状態になった。状況は学校によって違うが、生徒会から、昔のような文化祭をしようという議論があり、生徒会が寸劇をしたり、有志で出し物をしている学校もある。しかし、合唱コンクールだけというところもあるし、授業や総合学習でまとめたレポートをポスターセッションとして廊下に貼りだしている学校もでてきつつある。
- 教員の働き方改革と、こどもたちの発表の場やコミュニケーションの場のことを考える必要がある。生き抜く力を育てるという観点からは、従来のような、こどもたちが発想して企画して、みんなでまとめて、そこにはリーダーシップもあったり、コミュニケーション能力が求められたりする中で、生き抜く力が養われていたと思われるので、そういう意味では昔の文化祭的なものをもう一度導入すること、作り直すことが有効かと思う。
- 働き方改革の面からいうと、以前のような形で教員が2ヶ月間ハードな勤務が強いられないように考えていくとすれば、総授業時数の中で、文化祭活動も総合学習として折り込めるような制度改革をしていく必要があると思った。
- 中身はともかく、意見聴取の母集団が中心を占めているのか疑問がある。他で聴取するのは難しいが、体制としてどこがよいのかを慎重に考えた方が良いと思った。

市 長	<ul style="list-style-type: none"> 文化祭について、合唱コンクールとは全く意味の違うもの。これは考え直した方がよいと思う。 合唱コンクールは、指揮者の指揮に対してどう合わせていくのか。みんなで調和をとるが、一番大事なのは自分が突出しないということ。大きな声を張り上げ、自分が綺麗に歌えば良いというものではなく、みんなとどうやって調和しながら指揮者に合わせて音楽を作っていくのかがコーラスである。 文化祭は、みんなで創造的につくるというもので、対極にあるものだと思う。 どちらを選ぶかという話で、目的はしっかりと持ち、本質を認識した上で、やっていただければと思う。 教育大綱の素案について、担当課が、消費者教育を目標１に入れて人権教育と同列に並べていたが、消費者は経済学上の概念であって、人間はもともと消費者ではないということで元に戻していただいた。 同列に論じられるものではない。あくまで持続可能な経済という中で消費者であるので、そうさせていただいた。
事 務 局 委 員 市 長 事 務 局 市 長 教 育 長	<p>【議題②】パブリックコメントの実施について</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料３に基づき、実施期間、意見提出方法等について事務局より説明を行った。 「日本語で提出してください」と記入しているが、例えば英語で書かれると訳しにくいということか。日本語に限らないといけないのか。 英語であれば可能と思うが、その他の言語ならどうか、というところはある。英語ならよいとはならない。 翻訳が難しい。文章のニュアンスなどがわからないといった課題がある。 翻訳ソフトで翻訳するしかない。文化が違うので、完璧にはできないが。 学校現場で外国語支援をしながら意思疎通を図ってこどもとの関係を取り持っている。そういった方々が自分たちも意見を言いたいと思ったときに支援をすることになると思う。支援を受けられなかった方が、意見を出せないというのはどうか。AI（翻訳ソフト）で翻訳するということがよいのではないか。
生涯学習課 委 員	<p>【議題③】家庭教育の支援強化について</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料４に基づき、生涯学習課から概要を説明。 保護者に対して働きかけることは、デリケートな問題。気になっていてわかってはいるけれど、言われたら反発してしまうということ

委員長

があり、反発したままどううまくいかない。

- このような事業をしていただけるのは良いことだが、保護者が心を開いて、この人にだったら自分の弱みを見せて話せるし、この人の言うことだったらしてみようという身近な人の存在を作ることが大事。
- 教育でも福祉でも何でもよいが、身近な人が SOS を聞き取った時に、つなげていくシステム、保護者がどこへいっても弱さをさらけ出せるということが大事。このような事業を始めるのと一緒に、そういうことができれば良いと思う。
- 大事なことだと思っているが、難しく大きな内容だと思う。
- 以前現場にいた時に、こどもの事を第 1 に考え何とかしたいと思い、児童の家に行き、ご飯の事などについて話したが、「働かないと食べていけない。先生そんなこと言うけど、夜遅く帰ってきているのでどうしようもない。何とかしてくれるの。」と言われた。
- その際は、地域の支援員に寄り添ってもらえてよかったが、保護者を支援するということの難しさや、家庭によって状況も違う。
- 家庭教育支援コーディネーターや支援員に任せるのでは、事が大きいと思っている。
- 良いことだがすごく難しいし、深くいかなければいけないし、保護者の思いは一人一人違う。現場にいた時も同じ思いをしながら、どうしていったら良いか、大きすぎて抱えきれないと感じていた。

委員長

- 教育、福祉の 2 つの側面がミックスされていると感じた。
- うまくできればすごくよい支援になるが、教育と福祉の部署が互いに擦り付け合いをしてしまうと、せっかくの支援がもったいないことになる。
- 2 枚目の資料を見ていると、0 歳以上が対象で、福祉が担当になると思うが、連携ができれば良いものになると思う。

教育長

- 先ほど、1 対 1 で寄り添って、支援員に対して困難を抱えておられる保護者が心を開いて相談される、弱みも強みもそこでさらけ出しながら、相談しながらの関係づくりが大事という話があったが、そのとおりだと思う。
- 大きな課題で、それが故に今までこのような試みがまとまった形で打ち出せずにいた。学校は学校でこどもを介して保護者につながりを持ってきたが、学校教育も限界があり最後まで解決に至らないこともあり、あきらめ感があって今日まできた。
- 福祉の中でも連携しながら対応されているが、就学前の施設とうまくつながっていないケースもあると聞いてそこがうまくつながるとよい。
- 教育委員会では、小学校を対象に家庭教育支援員を設置するという取組を社会教育として実施していて、就学前施設には配置がない。

市長

そこにも家庭教育支援員のようなものを設置する必要がある、就学前施設とのつながりを持つことが必要。

- それぞれ独自に一步進むことに躊躇するところがあり、福祉と教育の2つに絞って連携することが大事。
- 教育というと学校教育が中心と捉えがちだが、社会教育は、就学時期に限られない。そこと福祉が連携し、1人1人の保護者とつなげられるようなコーディネーターや家庭教育支援員の熟度を高めたり、みんなが協力できるような環境を合わせて作っていくことが大事。
- ただ単に講座を開くだけではなく、個別に支援が必要な場合は、アウトリーチで届けていく、つながっていくということも含めた制度になれば、課題は徐々に解決され、5年10年続ける中で、徐々に本市の家庭教育環境がよくなっていくのではないかという期待がある。
- ヤングケアラーといって、こどもを働かしてはいけないと今はなっているが、以前はこどもが家庭を助けていた。親と子は共同作業をしなければいけなく濃厚な関係だった。今はそれが生まれにくい環境。
- 全員とは言わないが、こどもが今取り残される環境にある。
- どうして解決するのか。社会という大きなレベルで考えるものではあるが、できることから徐々に手を広げていこうということである。

事務局

4. 事務連絡

- 第3回総合教育会議は、令和7年12月下旬から令和8年1月中旬ごろを予定する。
- 第3回会議では、第3期教育大綱のパブリックコメントの実施結果をもとに、大綱の策定に向けてご議論をいただく予定。

5. 閉会

省略

終了時刻：11時05分